

新出石刻史料から見たソグド人研究の動向

榮 新 江 ・ 森 部 豊 訳・解説

Research trends in the study of the Sogdians from newly found archaeological epigraphy

RONG Xinjiang

This paper describes the current status of Sogdians research using archaeological epitaphic materials including the recently found stone inscriptions in China, and proposes research methods for such a study. First, the excavated state of the new epigraphic materials is reported, and the current status of their classification with updated publications is also reported. Secondly, among the epigraphic materials investigated by the author, a survey report of the materials related to 翟曹明 (Zhai Caoming) is available. Thirdly, the four recently found historically important materials on the Sogdian study such as the 安備 (An Bei) epitaph, the stone inscription on the 史盤陀 (Shi Pantuo) rock, the 鄭岩 (Zheng Yan) epitaph, and 景教 (Jingjiao; Nestrian) stela text found at 洛陽 (Luoyang) have been evaluated and archaeologically assessed. Finally, future studies on the Sogdians are reviewed with comments and suggestions.

はじめに

- 1 石刻史料の整理と公刊
- 2 ソグド人に関する石刻史料の調査
- 3 新出石刻史料のソグド人研究に対する貢献
- 4 ソグド人を判断する問題について

はじめに

私は、この20年来ずっと北朝・隋・唐時代に中国へ移住してきたソグド人の足跡を追ってきた。1994年に発表した「西域粟特移民考」¹⁾から1999年発表の「北朝隋唐粟特人之遷徙及其聚落」²⁾において、ソグディアナから中国東北部にいたるシルクロードの沿線上に分布するソグド人の状況をほぼ描き出した。またちょうど1999年に太原で虞弘墓が発見され、続いて2000年に西安で安伽墓が発見され、その後、史君墓・康業墓といった新たな考古学上の発見が絶えず現れた。私は、考古学の専門家の要望に応じて、これらの墓葬を整理するための歴史的背景となる資料を提供し³⁾、自分自身でもいくつかの出土文物に関する考察を行った⁴⁾。一方で、フランスの研究者の求めに応じ、2004年に北京において国際シンポジウム「粟特人在中国（中国におけるソグド人）」を開催し、同時に「從撤馬爾干到長安（サマルカンドから長安へ）」というミニ展覧会も開き、これらに関する書籍を主編し出版した⁵⁾。これらの新しい考古資料は、ソグド研究に豊富な材料を提供するものである。またこれらの新出史料とそれ以外の新出の石刻・文書史料を利用することで、私は自分の旧稿を補充する機会を得ることができ、西域および中原北方のソグド人聚落に関する補論を次々と発表し、あわせて南方のソグド人の足跡も検討することができた⁶⁾。しかし、2005年10月以降、私は「新獲吐魯番出土文献」の整理と研究にほとんどの時間を割くこととなり、ソグド研究を行う時間は無くなってしまった。

そのような折、関西大学が私を招へいし、再びソグド研究に力を注ぐ機会を与えてくれたこ

1) この論文の原題は「古代塔里木盆地周辺の粟特移民」で、1992年にウルムチで開催された学術会議「西域考察と研究」の論文として提出し、まず『西域研究』1993年第2期〔8-15頁〕に掲載された。後に修訂をほどこし、「西域粟特移民考」と名付け、学術会議の論文集に組込んだ〔栄新江1994, 157-172頁〕。その後、また「西域粟特移民聚落考」と題名を変え、栄新江2001b〔19-36頁〕に収録した。英訳はRong 2006aを参照。

2) 栄新江1999a, 27-85頁〔栄新江2001b, 37-110頁に所収〕。英文訳はRong 2000参照。ただし省略が多い。

3) 栄新江2001a；2006c；2005b；Rong 2003；2006b；2006c。

4) 栄新江2004b；2005a；2006a。

5) 栄新江・華瀾・張志清2005；栄新江・張志清2004。

6) 栄新江2005c；2006b；2007a；2007b；2007c；Rong 2009a。

とに感謝したい。2009年12月から2010年2月まで、私は関西大学と北京大学の交換訪問研究者として、関西大学に三カ月滞在し、研究に従事することができた。私が関西大学に提出した研究課題は「中古時期来華胡人碑誌疏證」である。これは、私がこの数年来、ずっと準備している書籍の題名でもあるが、現在まだ完成していない。そこで、このテーマに関する史料と研究の進展について、「新出石刻史料から見たソグド人研究の動向」と題して、最近の私の研究の進展状況を報告し、あわせて中国における近年のソグド人に関する石刻史料研究上の新たな収穫にも言及したい。

1 石刻史料の整理と公刊

この数十年來、中国各地で都市化に伴う建設ラッシュが急速にすすんでいる。その開発が、かつて城壁で囲まれていた「旧城」を超えてその外にまで及んでいくのにもとない、昔の墓葬地区であったところが、今では新しい都市の範囲内に組みこまれるようになってきた。その結果、多くの新しい建設工事によって、地下に埋まっていた古い墓も掘り起こされて整理された。それにより、墓誌を中心とする大量の石刻史料が、その他の考古資料とともに発掘され出てきたのである。また一方で、学術研究の推進により、早くに発掘されていた墓誌史料は、現在、わりあいまとまって公表されている。また、いくつかのばらばらに発見されていたものも、折よく整理され発表されている。この他、国内外の不法な古美術を扱う輩達の扇動のもと、いくつかの地区では再び盗掘活動がはびこり始め、経済的利益に駆り立てられ、大量の墓誌が盗掘されている。これらの墓誌は、転々とした後に博物館や図書館に収蔵されるものもあるが、個人のコレクターの手に帰ってしまうものや、さらには原石の所在がわからず、ただ拓本のみが社会に出まわるといったものもある。

最近、新たに出てきたソグド人に関する石刻史料は、主に墓誌である。これらのソグド人墓誌の出土地は、洛陽・西安および河北など北朝・隋・唐時期においてソグド人が比較的集中して居住していた地域に集中している。以下、ソグド研究の史料の観点から、これらの地域の墓誌史料の整理と公刊状況について、簡単に紹介していきたい。

(1) 洛陽出土の石刻史料

洛陽は、墓誌の出土が最も集中している地域である。過去に千唐志齋・鴛鴦七志齋・曲石精廬が収蔵する唐代の墓誌があり、これらは現在すでにすべて発表されている。1991年以来、洛陽出土の墓誌を集中的に発表している専門書には、以下のものがある。

1. 洛陽古代芸術館編『隋唐五代墓誌彙編・洛陽卷』[天津古籍出版社, 1991年]
2. 洛陽市文物工作隊編『洛陽出土歴代墓誌輯繩』[北京: 中国社会科学出版社, 1991年]
3. 李献奇・郭引強編『洛陽新獲墓誌』[北京: 文物出版社, 1996年]
4. 楊作龍・趙水森編『洛陽新出土墓誌積録』[洛陽師範学院河洛文化研究所系叢書, 北京図書館出版社, 2004年]
5. 呉鋼主編『全唐文補遺・千唐志斎新蔵專輯』[西安: 三秦出版社, 2006年]
6. 洛陽市第二文物工作隊喬棟・李献奇・史家珍編『洛陽新獲墓誌続編』[北京: 科学出版社, 2008年]
7. 中国文物研究所・千唐志斎博物館編『新中国出土墓誌・河南』[三] (千唐志斎 [壹])』上下2冊 [文物出版社, 2008年]

これらはすべて原石を収蔵する洛陽市文物工作隊・洛陽市第二文物工作隊・千唐志斎・洛陽師範学院などの学術機関の資料であり, 比較的信頼することができる。

この他に, さらに洛陽出土墓誌の専門書で, 拓本のみによ拠して作られた以下の史料集がある。

8. 趙君平編『邙洛碑誌三百種』[中華書局, 2004年]
9. 趙君平・趙文成編『河洛墓刻拾零』[北京図書館出版社, 2007年]
10. 張乃翥『龍門区系石刻文萃』[北京: 国家図書館出版社, 近刊]

これらの書籍には民間に散逸した多くの洛陽出土の石刻史料が収録されており, 非常に貴重である。例えば, 新たに出土したソグド人家族が建立した景教の経幢の初期の拓本(聞くところによればわずか4枚)のクリアな図版が『河洛墓刻拾零』に収められている。これらの中の墓誌の原石は, 現在所在が分かっているものもあるが, 不明なものもあり, それゆえその中に偽刻のものが含まれる可能性があることに注意する必要がある。

(2) 西安出土の石刻史料

西安も墓誌の出土が集中している地域である。また, 隋唐時代の多くの重要人物が長安周辺に葬られており, その中には中国へ移住したソグド人の首領も含まれている。例えば, よく知られている安伽・史君・康業・安元壽などがそうである。しかし, 西安出土の墓誌の公刊状況は, 洛陽ほど楽観的なものではない。

すでに出版されている『隋唐五代墓誌彙編・陝西卷』の図版には、はっきりしないものが多いがある。

陝西省古籍整理辦公室主編『陝西金石文獻彙集』は、陝西省の多くの県や市に所在する墓誌史料を含むが、西安地区の專輯は無く、ただもっぱら長安という観点から講ずるのみである。

張沛編『昭陵碑石』[三秦出版社, 1993年]が収録する碑志の主人公(墓主)は、すべてかつて「長安」で生活していた貴族・官僚であり、かつこの本の図版と録文の質はともに非常に高い。

陝西省古籍整理辦公室編・呉鋼主編『全唐文補遺』第1-9輯[三秦出版社, 1994-2007年]は、大量の西安出土墓誌の録文を収録しているが、その出典を説明しておらず、その出所を確定することができないくらいがある。

国家文物局が支援し、中国文物研究所と地方の関連部門とが協同で編纂した『新中国出土墓誌』シリーズには、『陝西』[壹]・[貳]の計4冊[文物出版社, 2000・2003年]があり、その中には西安地区出土の史料も含まれる。その図版と録文は『隋唐五代墓誌彙編』『全唐文補遺』より優れているが、収録されているものには依然として限界がある。

西安碑林博物館編・趙力光主編『西安碑林博物館新藏墓誌彙編』[北京, 線装書局, 2007年]は、1980年から2006年までに西安碑林博物館が収蔵した後秦から元までの墓誌381方を収録し、そのほとんどは初めて公表されたものである。しかし、その中の唐代墓誌の大部分は西安出土のものではなく、山西省西南部、すなわち唐代の沢潞一帯のものであり、晩唐時期のこの地域を研究するうえでの重要な史料群といえる。

実際、西安地域出土の墓誌を最も多く収集している陝西省考古研究所(現在は研究院)と西安市文物考古保護所は、いずれもまだ所蔵している墓誌史料を系統的に整理して出版していない。その中のいくつかの重要な墓誌は考古簡報あるいは考古報告によって報告されているが、全体の状況は不明である。私はかつて何度もこの両機関を訪れ、ソグド人墓誌の史料を探し求めたが、墓誌はすべて一つ一つ立て並べられ、重なりあったまま放置されており、動かすことは困難で、それゆえ現在にいたるまで具体的状況ははっきりしないのである。西安の南に位置する長安県は現在、昇格して長安区となり、そこに博物館を建設している。その収蔵品には長安区の管内で発見された多くの墓誌が含まれている。そこが所蔵するカルルク(哥邏祿)首領の熾俟迎の墓誌銘は、私が2007年10月に当該博物館に赴き、調査した際に発見したものである⁷⁾。

現在にいたるまで、比較的大型の墓誌集成としては、国家文物局の後押しのもとで編纂され

7) 榮新江2007d, 32-33頁; 2008年, 167-168頁。

た『新中国出土墓誌』があり、その第一期事業は1994年から始まって2009年に終わり、全10巻19冊が出版された。

- 『新中国出土墓誌』『河南』[壹] 1巻2冊, 1994年
- 『新中国出土墓誌』『陝西』[壹] 1巻2冊, 2000年
- 『新中国出土墓誌』『重慶』1巻1冊, 2002年
- 『新中国出土墓誌』『河南』[貳] 1巻2冊, 2002年
- 『新中国出土墓誌』『陝西』[貳] 1巻2冊, 2003年
- 『新中国出土墓誌』『北京』[壹] 1巻2冊, 2003年
- 『新中国出土墓誌』『河北』[壹] 1巻2冊, 2004年
- 『新中国出土墓誌』『江蘇』[壹] (常熟) 1巻2冊, 2007年
- 『新中国出土墓誌』『河南』[参] (千唐志齋壹) 1巻2冊, 2008年
- 『新中国出土墓誌』『上海・天津』1巻2冊, 2009年

これらの書籍は録文と図版を収録し、出土地に関する解題を付し、収録範囲は魏晋南北朝から明清にまでおよんでいて、その規模は大きく、おおよそ1949年以降に出土した墓誌はすべて収められている。しかし、墓誌の収蔵機関が極めて分散しており、また地方の文物部門の中には先に独立した墓誌史料集として出版した後で、『新中国出土墓誌』に収録しようと望んでいるところもある。そのため、『新中国出土墓誌』は前後して出版された類似の史料集と重複するものがある。我々はそれらの中の重複していない部分に注意しなければならない。それ以外に、これらの書籍の録文は、先人の業績をさらに進歩させている点にも注意すべきである。2010年3月以降、第二期事業が開始され、故宮博物院と中国文化遺産研究院（もと中国文物研究所）との協力により、計画では10巻20冊を出版する予定である。その内容は以下の通り⁸⁾。

- 『陝西』[参], 『河南』[肆] (千唐志齋貳), 『河南』[伍] (洛陽師範学院卷), 『北京』[貳], 『安徽卷』, 『江蘇』[貳], 『山西』[壹], 『江西』[壹], 『甘肅・内モンゴル・寧夏卷』, 『東北三省卷』

このプロジェクトは故宮博物院の王素氏が責任者として担当される。彼らは一県一県を調査

8) これは王素氏から情報を承った。謹んで謝意を表します。

し、拓本をとり、収録している。新たなソグド人墓誌が発表されんことを希望したい。

確かにソグド研究の視点から言えば、特定の地方の墓誌史料は、さらに重要になっていくだろう。例えば、康蘭英主編『榆林碑石』[三秦出版社, 2003年]は、ほとんど全て靖辺県の統万城(夏州)周辺から新たに出土した墓誌を公刊したものである。個別に報道されたものを除くと、ほとんどが今まで公表されていなかったもので、その価値は極めて高く、またソグド研究に新しい史料を提供してくれる。さらに王其英主編『武威金石録』[蘭州大学出版社, 2001年]も挙げるができる。この本は、武威地区で出土した石刻を収録し、その中には新出土の墓誌も含まれている。例えば、1997年に武威市高壩鎮で発見された開元十四(726)年の合葬墓から出土した「翟舍集及夫人安氏墓誌」は、我々が武威などの地域におけるソグド人の状況を研究する際の重要な史料であるが、これ以前は未発表であった。

各地で出土した墓誌史料は、必ずしも現地にあるとは限らない。例えば西安に新たに建設された大唐西市博物館は、洛陽において北朝・隋・唐時期の多くの墓誌を収集し、少なくとも2008年10月に私が調査に赴いた時までで200方余りを所蔵し、その中にはソグド人の墓誌史料もあった⁹⁾。これ以外に、何枚もの拓本が学術機関や個人に販売されている。例えば北京の中国国家図書館善本特蔵部は大量に購入しており、その数はおそらく2000種を下らないだろう。北京大学図書館も最近の10年ほどで様々なルートを経て各地の新出の墓誌の拓本を購入しており、現在すでに2000種余りを有している。これらの史料のあるものはすでにネット上にアップロードされ、またあるものはまだ目録を整理しているところである。北京大学図書館は将来『北京大学図書館蔵歴代墓誌拓本彙編』を出版する予定である。

多種多様な出版物の背後には、また大きな憂うる問題もある。それは多くの仕事の水準が低いことである。拓本は重複して印刷され、偽作の判断は周到に行われておらず、録文の正確さは不十分でかつ大多数には校勘記も無く、多くの史料の来源についての説明が曖昧なことなどがあげられる。その中であって、周紹良主編『唐代墓誌彙編』[上海古籍出版社, 1992年]のように依拠した拓本あるいは写真の出所を説明するもの、また王其禕・周曉薇編著『隋代墓誌銘匯考』[線装書局, 2007年]のような先人の研究成果を可能な限り集めまとめた著作は、実に貴重な成果といえる。だから、我々はこれらの墓誌史料を扱う時、異なった拓本写真を突き合わせる必要があり、文字についてもいくつかの録文を照合し、拓本写真と照らし合わせ、良いものを選択して従う必要がある。拓本の品質に雲泥の差があることもあるからだ。例えば、洛陽出土の唐の咸亨元(670)年の「康敬本墓誌」をとり上げてみよう。この墓誌は、もともと

9) 毛陽光[2009b]は、現存する大唐西市博物館収蔵の洛陽出土の二つのソグド人墓誌を発表している。

千唐志斎の所蔵するものである。『千唐志斎蔵志』・『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本彙編』・『隋唐五代墓誌彙編』が載せるこの拓本の図版は互いに似ており、どれもみな残欠している。『唐代墓誌彙編』はこれに拠って積録しており、欠字が非常に多い。ただ、『洛陽出土歴代墓誌輯繩』が載せる図版は善拓で、文字も比較的完全であり、『全唐文補遺』はおおむねこの図版に拠って積録していて、得られる文字数は『唐代墓誌彙編』に比べ多い¹⁰⁾。原石は千唐志斎に所蔵され、その拓本はあちこちにあるのに、なぜ洛陽市文物工作隊所編の『洛陽出土歴代墓誌輯繩』だけがこの善拓を利用したのかは分からない。私は、その他の所蔵機関も同様の善拓を持っているが、発表する際に、丁寧に選び照らし合わせなかっただけのことだと考えている。

すでに発表されている墓誌の録文には、このような問題があることから、私はこの数年来ずっと石刻史料の中から北朝・隋・唐時期に中国へ移住したソグド人史料を集め記録してきた。しかし、その間に新獲吐魯番出土文書の整理作業とその他の事情により、ソグド人墓誌史料の整理は、スピードが落ちている。現在までに、私はすでに大体8000件の墓誌の中から、190余りのソグド人あるいはソグド人と関係するその他の人の墓誌を確定した。そのうち一部の墓誌は図版も録文も発表されておらず、私が数年来の調査で入手したものである。私の最初の作業は録文作成であり、これはすでに大体完成している。ちょうど、各種の図版と拓本とを照合し（品質が一定でないため）、最後に最良のソグド人墓誌の録文を完成させるのである。次の作業は、墓誌の来源・ソグド人一族の確定・婚姻関係・墓誌に記されるソグド人の重要な事績などの事項に対し、墓誌の記載内容と関連する問題を結び付け、解釈を加えることである。ソグド人の墓碑・墓誌に対し、総合的な整理をし、あわせて学界に精確な照合を経た録文の史料集を提供し、『中古時期来華胡人碑誌疏證』を完成することを希望している。日本の研究者はソグドの歴史・言語・宗教方面において非常に大きな業績を出している¹¹⁾、私は今回の日本滞在の機会を利用し、日本におけるソグド研究の成果を系統的に収集することができた。

2 ソグド人に関する石刻史料の調査

非常に多くの墓誌の図版と録文の史料集が出版されているが、いくつかの史料は容易には獲得することはできず、何度も現地に足を運び、様々な関係を通じて収集しなければならない。例えば統万城出土の「翟曹明墓誌」は、私が非常に長い時間をかけて調査した結果、入手したものである。

10) 具体的な文字の対照は、史睿 [2004, 34-40頁] を参照。

11) Moriyasu 2008, pp. 1-39.

2001年元旦、成都で開催された唐研究基金会学術委員会の年会が終了した後、私は姜伯勤教授と一緒に西安に赴き安伽墓から出土した文物を参観した。その後、陝西歴史博物館へ行って「三秦瑰寶」という特別展示を参観し、『三秦瑰寶——陝西新發現文物精華』という図録を購入した¹²⁾。展覧会場には「唐翟曹明墓」出土というタイトルの石の墓門が陳列してあり、図録にも載っている。石門は赤色の下地で、表面の胡人の天王の姿が人の注意をひきつけた。私は、石門の図像は北朝の要素を有していると推測したが、しかしはっきりとした結論を出すことは難しかった。「唐翟曹明墓」というタイトルがつけられているということは、きっと墓誌が出土しているはずであると考えた。そこで北京にもどって、寧夏回族自治区考古研究所の羅豊氏に連絡したところ、彼から次のような話を聞いた。すなわち、「翟曹明」の墓誌は存在し、なおかつ彼は陝西歴史博物館の倉庫で墓誌の文字を写し取ったという。しかし、墓誌はすでに破損しているため、取り出して陳列できないのだということも聞いた。羅豊氏は、彼が写し取った墓誌の文字をFAXで送ってくれたが、いくつかの文字は確定できていなかった。

2003年9月、陝西師範大学の西北歴史環境与経済社会発展研究中心が統万城で学術研討会を開くことになったため、私はこの機会を借りて西安から陝西師範大学の車で陝西省最北辺の統万城を訪問し、羅豊氏も銀川から靖辺県に招待した。この時、靖辺県文物管理所など関連部門のおかげで、「翟曹明墓誌」を見ることができ、あわせて現存する文字を写し取ることができた。墓誌はまだ正式発表されていないので、私は会議論文集の論文として最後に提出した「中古中西交通史的統萬城」の中で、摘録し引用するにとどめた。墓誌の記載によれば、翟曹明は「西国の人なり」とあることから、彼は中央アジアから移住してきたソグド人であり、当地において夏州天主・儀同に任じられたと推測した¹³⁾。墓誌の紀年は非常にはっきりしており、すなわち北周の大成元（579）年三月四日（大成元年二月辛巳にすでに大象の年号に改められているが、しかし夏州は都から離れていたため、その情報がまだ伝わっていなかったのだろう）であり、すると翟曹明は「三秦瑰寶」展覧の説明が言うような唐の人ではなく、安伽と同一年に埋葬された西国の「胡人」ということになる。我々と一緒に靖辺県文物管理所で石門を参観した安伽墓発掘者の邢福来氏は、翟曹明墓の石門の傍の石獅子は安伽墓の石獅子と非常に似ている、と指摘した。その時、我々と一緒に参観していた人の中には、榆林地区文管会主席の康蘭英女士もいた。

なぜかはわからないが、この重要な統万城出土の墓誌はその他の統万城墓誌といっしょに康

12) 陝西省博物館編、西安：陝西人民出版社、2001年。

13) 柴新江2004c、29-33頁。しかし、この中で墓主の埋葬日に関して「大周大成元年歲次己亥三月癸四日」と書いたのは、誤りである。

蘭英主編の『榆林碑石』に収録されなかった。この本の奥付は2003年10月の出版であるが、実際の出版時期はもっと遅かったはずである。かつ今まで翟曹明墓に関する考古簡報とともに発表されてもいない。2007年8月、中央大学妹尾達彦教授が主催する「農牧交錯地帯城址与環境2007年日中韓学術考察」に参加する機会を得て、私は羅豊氏と再び一緒に靖辺県文管所を訪問することができ、仔細に墓誌・石門と、後にまた見つけ出した同墓から出土したいくつかの文物を調査した。本稿では墓誌の状況のみを紹介していくこととする¹⁴⁾。

墓誌は石灰岩製で、マス目があり、横方向に18マスある。石板は左側が欠けて失われており、縦方向には15行残っているが、一般の墓誌が多くは正方形である慣例に照らし合わせると、18行でなければならない。現存する内容から推測すると、欠けて失われた文字は多くはない。まず「翟曹明墓誌」の残っている文字を復元した石板上に書き写してみよう。

	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1			
				延	中	縣	二	親	敗	而	賞	以	官	來	君	未	大	1
				長	貞	遠	儀	屬	七	永	既	慕	恂	朝	諱	夏	周	2
					獨	仁	既	哀	月	固	降	義	恂	遂	曹	州	大	3
					步	風	泮	傷	三	庶	威	從	鄉	居	明	天	成	4
					世	稍	清	故	日	比	聲	軍	邑	恆	西	主	元	5
						陳	濁	追	遭	玉	漸	誅	傷	夏	国	儀	年	6
						子	殊	德	疾	而	著	除	魏	君	人	同	歲	7
							津	申	捐	恆	朝	亂	裁	幼	也	翟	次	8
							曷	悲	館	堅	野	逆	之	懷	祖	君	己	9
								乃	春	豈	欽	巨	袁	岐	宗	墓	亥	10
								爲	秋	謂	風	猾	泯	嶷	忠	誌	三	11
									九	盛	臣	摧	慨	長	烈		月	12
										夏	民	峰	臣	有	令		癸	13
											敬	六	下	才	譽		巳	14
											尚	軍	之	雄	家		朔	15
												振	僭	罌	邦		四	16
												振	凌	罌	受		日	17
												守	是	當	命		乙	18

次に、「翟曹明墓誌」を行ごとに句読点を打って記してみる。残欠部分は墓誌のマス目によっ

14) この墓誌と墓門の詳細な研究については、羅豊・榮新江「北周西国胡人翟曹明及其墓門画像」(待刊)を参照。

て欠字数を推測して補った。16行目から18行目は文字がすべて欠けているため、空格を推測し補うことはしない。

- 1 大周大成元年歲次己亥三月癸巳朔四日乙
- 2 未夏州天主儀同翟君墓誌
- 3 君諱曹明，西国人也。祖宗忠烈，令譽家邦。受命
- 4 來朝，遂居恒夏。君幼懷岐路嶷，長有才雄。喆喆當
- 5 官，恂恂鄉邑。傷魏載之衰泯，慨臣下之僭凌（凌）。是
- 6 以慕義從軍，誅除亂逆。巨猾摧峰，六軍振振。守
- 7 賞既降，威聲漸著。朝野欽風，臣民敬尚。□□□
- 8 而永固，庶比玉而恒堅。豈謂盛夏□□，□□□
- 9 敗。七月三日遭疾捐館，春秋九□□。□□□□，
- 10 親屬哀傷。故追德申悲，乃爲□□：（以下は、字が欠けていない可能性あり）
- 11 二儀既泮，清濁殊津。曷□□□，□□□□。□□
- 12 縣遠，仁風稍陳。子□□□，□□□□。□□□□，
- 13 中貞獨步。世□□□，□□□□。□□□□，□□
- 14 延長。□□□□，□□□□。□□□□，□□□□。
- 15 □（以下は欠けて失われているので、欠字の字数不明）

翟曹明墓誌の名称（誌題）の前に書かれている「大周大成元年歲次己亥三月癸巳朔四日乙未」の日付は、埋葬した時に違いない。「大成」は北周宣帝（宇文贇）の年号であり、大成元年は西暦579年にあたる。墓誌に関する内容は、すでに別の論文で検討しているので、ここでは繰り返さない。

統万城は十六国時期の大夏の都であり、北魏が始光五（428）年に、この地を攻撃して占領し、統万鎮を設置し、後に夏州と改めた。ここは河西走廊から薄骨律（靈州）を経て、オルドス沙漠の南辺ルートに沿って北魏の都である平城（大同）に至る中間の拠点であり、東西交流史上におけるその地位は重要である。遠くペルシア・ソグドから平城へ至る西域の朝貢使節は、すべてここを通過しなければならなかった。西魏・北周の時、統万城は依然として北方の重要な軍鎮であった¹⁵⁾。西からやってきたソグド商人も、ここで足を留め、植民聚落を形成したはずである。翟曹明はつまり北周末年の夏州地区におけるソグド人の首領であり、彼はもともと「郷

15) 榮新江2004c, 29-33頁；2007a, 169-170頁。

邑」で官職に就き、「天主」の職に任じられたに違いない¹⁶⁾。北魏がこれを滅ぼした際、北魏の軍隊に加わり、「儀同」職に任じられたが、これはすなわち国家の授けた郷団統帥の称号である¹⁷⁾。

『榆林碑石』が発表した墓誌史料によれば、唐宋時期、ソグド人は依然として統万城において非常に強い勢力を持っていた。西周時期の西涼の大豪族であった安旻¹⁸⁾、さらに北宋初年の定難軍管内都軍指揮使の康成此¹⁹⁾は、現地のソグド人首領であったにちがいない。さらに、武威の安氏一族の安元寿が永隆二（681）年に夏州群牧使に任命されたほか外、唐朝の華嚴宗の賢首大師法蔵の弟の康寶蔵も、神竜二（706）年以前に朝議郎の身分で「統万監副監」となり、かつ法蔵の伝記からみると、その弟の寶蔵が夏州の統万監に任じられていることから、天授元（690）年以前に、法蔵一家は夏州に居住していたことがわかる²⁰⁾。これは、山下将司氏が唐代の監牧制と中国へ移住したソグド人との関係の問題について論証したもの²¹⁾に、一つの事例を付け加えるものである。

さらにいくつかの史料は現在に至るまでまだ完全にはその所在が確かめられていないものもある。私がここで言うのは、北京で出土した「何府君及夫人康氏墓誌」のことである。1998年12月13日付けの『北京青年報』の報道によれば、同年12月9日、北京燕京汽車製造廠で二基の唐代の墓が発見された。出土した墓誌の記載によれば、墓主の姓は何、柳城の人であり、開元九（721）年に范陽で亡くなり、夫人の康氏は、史思明が皇帝を称した順天元（759）年に亡くなったという。これは典型的なソグド人家族であり、かつ安史の乱の首領である安祿山や史思明と同様に柳城を本貫としており、安祿山および幽州地域のソグド人を研究する上での重要史

16) 2004年4月23日から25日において、北京で開かれた国際学術討論会「粟特人在中国」において、その時発見されたばかりの康業墓誌の「大天主」の称号を討論した時、私は口頭で次のような意見を発表した。すなわち、「翟曹明墓誌」中の「天主」とは、いずれも「祚主」の意味であるはずであり、というのは、その当時まだ「祚」という字は無かったので、「天主」は唐代の「祚主」であることが証明できる。程林泉・張翔宇・山下将司〔2008, 83頁〕は、康業の「大天主」称号を論述する時、また単独で「天主」は「祚主（祝）」であるとしている。しかし、私は「祚主」は「祚祝」とは同じものではないと考えている。

17) 山下将司〔2004, pp.60-77; 2005, pp.65-78〕、蘇航〔2005, pp.173-186〕の関連する記述を参照。榮新江〔2009, pp.27-29〕はこれに対し、補充して検討している。

18) 康蘭英編著『榆林碑石』、西安：三秦出版社、2003年、図29、録文は211頁参照。

19) 『榆林碑石』、図82、録文は253頁参照。

20) 崔致遠「唐大薦福寺故寺主翻經大徳法蔵和尚伝」〔『大正新脩大蔵経』巻50, 281-283頁〕。関連史料の考証は、Jinhua Chen, *Philosopher, Practitioner, Politician: The Many Lives of Fazang* 643-712, Leiden: E. J. Brill, p. 355, n. 95. を参照。康寶蔵が統万城一帯の唐朝の監牧を管轄していた事跡に関しては、榮新江〔待刊〕の論証を参照されたい。

21) 山下将司2008, 539-569頁。

料である²²⁾。しかし、現在に至るまで、このような絶妙な史料は正式に発表されていないのである。

この墓誌は北京に所蔵され、私も北京に住んでいる。しかし、1998年以來、私は墓誌の行方について何度も問い合わせをしたが、まだ見つかっていない。北京市文物研究所がその墓を発掘したのだから、彼らが所蔵していると言う人もいれば、その墓は遼金城垣博物館のすぐ近くのだから、その近くにあるはずで、おそらく遼金城垣博物館が所蔵しているという人もいる。また、史料が整理し終わった後、首都博物館に引き渡されたか、あるいは北京石刻博物館（五塔寺）にあるともいう。しかしいずれも確実な情報ではない。ちょうど、2008年の夏ごろ、私は大葆台漢墓博物館の白岩館長（北大卒業生）の協力を通じて、北京市文物研究所副所長の趙福生氏のところで、この墓誌の録文を見たことがある。彼が早くから『北京歴史地図集』のために史料を収集していた時に写し取ったものだが、原石についてはどこにあるかは忘れてしまったとのことである。この写し取りに拠ると、以下の事実が明らかとなる。何君の諱は數、字は延本といい、柳城の人であり、かつて北平盧龍府別將に任じられ緋魚袋を賞し、開元九（721）年に范陽の私第において享年55歳で亡くなったこと、また夫人は蘭陵の康氏で、順天元年に享年87歳で亡くなり、何數と燕台郷の平原に合葬されたことなどである。これらは疑いなく、我々が幽州のソグド人の具体的状況を考察する際にさらに多くの情報をあたえてくれるものである。

3 新出石刻史料のソグド人研究に対する貢献

本節では、いくつかの最近発表された石刻史料をとりあげ、いくつかの方面におけるソグド研究に対する推進の様を紹介していこう。

(1) 隋・安備墓誌

この墓誌は2007年に河南省のある場所で、漢白玉にレリーフがほどこされた石棺牀の台座の片方と一緒に出土し、現在は西安の大唐西市博物館に徴集・収蔵されている。葛承雍氏は「祇教聖火芸術の新発見——隋代安備墓文物初探」を発表し、この墓誌の録文を作成し、あわせて考釈をし、特に石棺牀の台座上の祇教の図像に対し、安伽墓・虞弘墓の同類の図像と結び付けて、芸術の観点から分析をほどこした²³⁾。以下、図版と照らし合わせ、録文を次に掲げる。字を個別に訂正するにとどめた（末尾【訳者解説】参照）。

22) 柴新江1999a, 68頁；2001b, 105頁。これは『北京青年報』にもとづいて執筆した。

23) 葛承雍2009, 14-18・90-91頁+図版1-4・彩版1-3。

故開府長兼行參軍安君墓誌銘

君名備，字五相，陽城縣龍口鄉曹劉里人。其先出於安居耶尼国，上世慕中夏之風，大魏入朝，名沾典客。父知識，齊車騎大將軍・直盪都督・千乘縣散男。君種類雖胡，入夏世久，与漢不殊，此即蓬生麻中，不扶自直者也。善於白圭之術，蕙而不為²⁴⁾；玄高之業，棄而不慕。訥言敏行，唯事安親。室名龍駒，鄉號指南。孝悌之響，聞於邦国。武平之末，齊許昌王莫（幕）府初開，牒為長兼行參軍。一參府寮，備經駟使。雖未執斷，小心恭奉。時輩之中，謙直遜順。屢展勤誠，漸望昇進。但事与願違，遇周統齊，許昌失寵，歸於廉之第。君便義絕，遂還舊廬，斂志東畢，歸田二頃。忽縈疾〔病〕，醫僚（療）無工。大命運窮，奄從朝露。時年卅有四，以大隋開皇九年歲次己酉十月辛酉朔廿四日甲申塋於潔水之南，長分橋側。恐山壑時移，乃為銘曰：門標貴胄，世代高良；比蘭斯馨，譬藜能芳。弱冠釋褐，奉事君王。年始過立，奄歸元常。

安備は開皇九（589）年に埋葬され、年は34歳であったから、その誕生は北斉の天保六（555）年ということになる。墓誌の記載によれば、その先祖はもともと「安居耶尼国」の出身であった。祖父が北魏時代に中国へ移住し、典客、すなわち外来の客や使者をつかさどる職務に任じられている。父の名は「知識」であり、これは胡名を音訳したものにちがいない。父は、北斉の車騎大將軍・直盪都督・千乘縣散男に任じられている。安備は当初、仕官しておらず、「白圭の術、……玄高の業を善」くしたと記される。白圭・玄高はともに戦国時代の著名な商人であり、それゆえここでは暗に安備の商売の能力を指しているのだろう。後に彼は許昌王の幕府に入った。しかし北周が北斉を滅ぼした際に、彼は屈服せず、故郷に帰って耕作に従事し、年僅かに34歳で亡くなった。

この墓誌の内容は、まだ解決できていない問題がある。例えば、安姓は一般には安国の出身といわれるが、なぜ「安居耶尼国」と称し「安国」と称さなかったのか。道理からすれば、「安国」という名は北周の時にすでに出現しており、開皇年間の初めに令を定めた時、「安国伎」の名称がすでに使用されている²⁵⁾。さらに「千乘縣」「許昌王」「潔水之南」などのように葛氏の論文では妥当な解釈が与えられていないものもある。特に、墓誌と一緒に購入された石棺牀の台座も問題がある。この台座は、漢白玉で制作されており、真中には火壇と人身鷹爪の祭司が彫

24) 第5行と第6行の最も下の「此」「蕙」の二字の上に、重ねて刻した「陵易」の二字がある。

25) 齊藤達也2009, 49-50頁。もし「安居耶尼国」という名称があったことにより、当時「安国」という呼称がまだ固定していなく、従ってプハラに対し様々な記述方法があったと解釈するならば、この「安居耶尼国」という記述も、全く完全に成立する。さらに齊藤氏の見解とも合致する。

られている。その様式はアメリカのフーリア美術館が所蔵する安陽の石棺牀台座や日本の Miho 美術館の石棺床の台座の部分と伝えられるメトロポリタン博物館が所蔵するものと同じである²⁶⁾。すなわち墓主の身分は相当に高かったはずで、あるいは薩宝クラスであったかもしれない。しかし、誌文によれば、安備は世を去る時、いかなる官職にも就いていなかったし、また、この棺牀の台座が墓誌と一緒に出土したものであるかどうか、わからないのである。

私が最初にこの墓誌を見たのは、趙振華氏が寄贈してくれた王繡編『洛陽民間收藏精品集』²⁷⁾においてである。かつて洛陽龍門石窟研究院の張乃翥氏にこの墓誌について教示いただいていたが、彼はこの墓誌に対して懐疑的であった。後になって、大唐西市博物館の招待を受けたが、しかし諸事情のためずっと調査に行くことができないでいる。現在、葛氏の論文に対して少しばかりの考えを提示するだけである。もし、これらの疑問が円満に解釈できれば、これは新出の隋代のソグド人に関する本物の史料であるといえるだろう。

(2) 史盤陀およびその子孫一康・安両氏との通婚

かつて洛陽で「唐呼論県開国公新林府果毅墓誌」という墓誌が出土した。墓主は「公の諱は陀，字は景□，□会稽の人□（公諱陀，字景□，□会稽人□）」と記されるが、姓は失われている。貞観七（633）年に亡くなり、顕慶四（659）年に埋葬された²⁸⁾。また千唐志齋が所蔵する「安懷夫人史氏合葬墓誌」には「夫人史氏，隴西成紀の人なり。祖の盤陀，唐の任ずる揚州新林府車騎將軍，呼崙県開国公たり。父の師，□朝左□衛（夫人史氏，隴西成紀人也。祖盤陀，唐任揚州新林府車騎將軍，呼崙県開国公。父師，□朝左□衛）」と記される。夫人は長寿二（693）年に亡くなり、享年64歳であった²⁹⁾。「康君夫人史氏墓誌」には「夫人の姓は史，洛州洛陽の人なり。祖の□陀，呼論県開国公，新林府果毅たり。父の英，左衛郎將たり，父邑を襲封す。顕慶六（661）年二月廿三日，私第に終る。春秋卅有六（夫人姓史，洛州洛陽人也。祖□陀，呼論県開国公，新林府果毅。父英，左衛郎將，襲封父邑。顕慶六年二月廿三日，終於私第，春秋卅有六）」³⁰⁾とある。趙振華氏は、これは同一血族の家族三代のものであると指摘した。これに

26) Carter 2002, pp. 263-287.

27) 王繡編『洛陽民間收藏精品集』，北京，解放軍外語音像出版社，2009年，126頁。

28) 洛陽古代芸術館編『隋唐五代墓誌彙編・洛陽卷』4，天津古籍出版社，1991年，17頁；『唐代墓誌彙編』，297頁；『全唐文補遺』2，160-161頁。

29) 『隋唐五代墓誌彙編・洛陽卷』7，21頁；『全唐文補遺』2，325-326頁。

30) 『隋唐五代墓誌彙編・洛陽卷』4，72頁；『全唐文補遺』2，171頁。

より、我々は史陀の姓を補うことができるだけでなく、また彼の名前「盤陀」をも補うことができる。「盤陀」はソグド人が最もよく用いる名前である³¹⁾。さらに、河西の会稽から隴西の成紀、さらには河南の洛陽まで、この家族が移住したルートを描き出すことができるのである。この家族に関しては、最近発表された史料によって、また新たに補うことができる。「康老師及夫人史氏墓誌」がその新史料であり、その誌文に「夫人は史氏、即ち呼論公の孫なり（夫人史氏、即呼論公之孫也）」とある。すると彼女は史盤陀の第三の孫娘ということになり、彼女が嫁いだ康老師は、「其の先は康国の人なり。……曾祖の寶，康国王の第九子なり。周の游撃將軍，以て西諸国首領たり（其先康国人也。……曾祖寶康国王之第九子也。周游撃將軍，以西諸国首領）」という。康老師は康国の貴族の子弟であり、正式な官職には就いていないけれども、「金鞍寶馬」という誌文の表現は、雅で富裕な様を表現し、ソグド商人のようである。二人は垂拱三（687）年に北邙山の平楽原に合葬された³²⁾。この一連の四つの墓誌は、また我々に唐の高宗・武則天時期の洛陽におけるソグド人－康・安・史三姓の間における通婚の状況を教えてくれる。

(3) 唐少府監鄭岩墓誌

最近、趙振華氏は「唐少府監鄭岩及其粟特人祖先」という論文を著し、ソグド人と関係する非常に重要な墓誌を紹介された。それは近年、洛陽市伊川縣彭婆郷許營村で発見された「唐少府監鄭岩墓誌」である。この墓誌は石灰岩で製作されている。一辺の長さは78cm、楷書で27行、全行29字である。右下角が欠けて失われており、10余字が失われている。墓誌は憲部尚書張均の撰になり、その大略は以下のとおり。

維天寶十一載歲在壬辰正月己卯朔十七日乙未，銀青光祿大夫・□□□・上柱國・咸林縣開國伯鄭君卒于咸寧之親仁里，春秋六十有五。……夏五月□□□十五日辛未，歸窆于河南伊訥郷萬安南原。

君諱岩，字良石，河南滎陽人。周之胄系，昔宣王封友于鄭，氏之以国。……君六代曰盤陀，當後魏練次名宗，尤推北祖之盛。烈考齊州歷城丞，出為循良，入為孝悌；蘊沖德以潛施，克追榮以顯復。君即歷城府君次子，故工部薛紘之甥。……君夫人，余之女弟。德配君子，行標母儀。嗣子潤，次汲，次泌，並以貞秀履清貫。

31) 趙振華2009, 79頁。

32) 『全唐文補遺』8, 294-295頁；『洛陽新獲墓誌続編』, 54頁。毛陽光 [2009a, 77-78頁] も参照のこと。

この墓誌は、鄭岩の家系を考察する上で、非常に重要な史料である。鄭岩より前の三代について、『新唐書』卷75上「宰相世系表」[中華書局, 3306頁]では、

〔鄭〕德淹。行諶，薩寶果毅。琰，歷城主簿。

と記している。すなわち、鄭岩の祖父の鄭行諶は「薩寶果毅」に任じられていたことがわかる。以前、我々はこのような純粋な漢人の名を持つ者が、なぜソグド人の職官を担当したのか、ずっと理解できなかった。趙振華氏の考証によれば、墓誌の撰者の張均は鄭岩の妻の兄、すなわち紫微令・燕国公張説の長男であり、鄭岩は張説の女婿ということになる。『新唐書』卷75上「宰相世系表」には、鄭氏は姬姓の出自であり、周の宣王姫静の異母弟である姫友が鄭（現在の陝西省華県）に封ぜられ、鄭国の国君となり、よってこれを姓としたと記載されるが、これは普通唐人の墓誌に見られる仮託の言葉である。しかし、この墓誌は特に自分の祖先を「六代曰盤陀，當後魏練次名宗，尤推北祖之盛」と追述している。「盤陀」は明らかに胡名である。つまり、墓誌はわざと六代前の先祖を「盤陀」と記すことによって、その出自が外国の異民族にあることを示したのである。そして鄭岩の祖父の行諶が「薩寶果毅」であることから、またこのいわゆる代々の名望家である滎陽の鄭氏の出自というのも、明らかに仮託であることがわかる。彼らはもともとソグド人に違いなく、滎陽の鄭氏の北祖と系図をつなげるという手段を通じて、鄭姓に改姓したのである。おそらくこれは、唐初に鄭行諶が薩寶果毅に任じられた後に行われたことであろう。これにより、このソグド人一族は漢人の一員となり、行諶の子の琰は河東薛氏を娶り、鄭岩は張説の女婿となったのである、もし墓誌の撰者がわざとその六代前の祖先を「盤陀」と書かなかつたら、我々はこの鄭岩の家族がもともとはソグド人であったことがわからなかったのである³³⁾。

この例は、ソグド人研究に対して極めて重要である。以前、私が薩宝の問題を論じた時、基本的には薩宝はすべてソグド人が担当し、薩宝府の構成員も基本的にソグド人であると結論付けたが³⁴⁾、唯一、鄭行諶一人だけが、うまく解釈できなかった。すなわち、鄭岩墓誌の発見は、この疑問を氷解させてくれたのである。そして、鄭氏一族の事例は、今後の研究において、その他の漢姓の人物の先祖に胡名があるかどうかを詳しく見ることに対し、普遍的な意義を持つものなのである。

33) 趙振華 [待刊]。これは趙氏から電子原稿を提供していただいた。ここに謹んで謝意を表します。

34) 榮新江2003a, 128-143頁；2003b, 385-412頁；Rong 2009b, pp. 148-162.

(4) 洛陽景教経幢と安史の乱後の洛陽におけるソグド聚落

私はかつて安史の乱前後のソグド人墓誌銘の違いについて、仔細に対比したことがある。安史の乱以前に書かれた墓誌には、ソグド人はその出身を忌避することはなく、中には直接西域のある国出身と称すものもある。しかし、「安史の乱」（安祿山と史思明らが起こした事件）のリーダーがソグド人であったため、「安史の乱」後の唐代社会では、「胡化」に反対する社会的思潮が充満し、中原で生活していた多くのソグド人の墓誌は明らかな変化が生じてきた。それは出身を忌避し、彼らは極力自分自身の出身と郡望を改変する方法で、ソグド人（胡人）とはっきりと一線を画そうとしたのである。例えば、武威の安氏が李氏と改姓し、康氏は会稽の出自であるとこじつけ、何氏はその本貫が廬江にあると自称した。その上、河北三鎮に移住し、自分自身の新たな郷里を求めたソグド人もいた³⁵⁾。新出の石刻史料はこの観点に対しても新たな補充をしてくれる。

2006年5月、洛陽隋唐故城の東郊で非常に珍しい景教の経幢が出土した（【訳者解説】参照）。前面には「大秦景教宣元至本経」が刻され、後面は経幢の題記である。題記によると、元和九（815）年に洛陽の景教僧侶の清素、従兄の少誠、舅の安少連、そして義理の叔父である上都（長安）左龍武軍散将の某等が、洛陽県感徳郷柏仁〔里〕に土地を購入し、亡き母である安国安氏太夫人および亡き師匠の伯修のために墓を造り、あわせてその上に景教の経幢を建てたという。さらに「大秦寺主法和玄英，俗姓米。威儀大徳玄慶，俗姓米。九階大徳志通，俗姓康」らも、この事業に参加していた。張乃翥氏は、開成二（837）年に葬られたソグド人の後裔と思われる「史喬如墓誌」³⁶⁾をはじめとする洛陽から出土した様々な碑誌史料にもとづき、唐代の東都洛陽城外の東南隅一帯には、ソグド人の聚落が存在したと推測した³⁷⁾。この考えに、私は賛同する。安史の乱以後の洛陽においてもこのようなソグド人聚落が存在し、かつ自身が安国の人であることや、「俗姓米」「俗姓康」などのソグド的特徴を標榜することを忌避しなかったことは、おそらくこの聚落では、景教が彼らの庇護者であったからだろう。我々は、安史の乱中に、景教の僧侶が朔方軍の支持者となり、勲功を建てたことを知っている。ゆえに、景教は唐朝の保護を受け、長安の大秦寺には「大秦景教流行中国碑」が建てられた³⁸⁾。この経幢は、長安の大秦寺の僧侶が主にペルシア人であったのと異なり、洛陽の大秦寺の僧侶は主としてソグド人で

35) 榮新江2004a, 102-123頁。

36) 『全唐文補遺』6〔149頁〕を参照。

37) 張乃翥2009, 98-106頁。張乃翥氏は洛陽の人で、最も早くこの経幢の学術的価値を見出し、学界に報告した。彼はまたずっとこの経幢の出土の問題を研究している。

38) 榮新江1999b, 142-143頁；2001b, 364-365頁。

あったことを示している。また、元和九（815）年の時点では、洛陽の大秦寺の、主な神職の人員はソグドの米国と康国出身の人であり、安氏太夫人の夫もソグド人（おそらく米姓）であり、彼らの子供で僧の清素は同じく洛陽の景教寺院に所属し、その義理の叔父が任じられた上都禁軍左龍武軍散將の職も唐朝がもっぱらソグド人の子弟にあたえていたものであると推測できる。史書の記載によれば、貞元三（787）年、唐朝は西域の「胡客」をとり調べ、以前に鴻臚寺から供給されていた者で、すでに長安に田地・宅地を持っている者についてはその支給を停止し、これを神策兩軍に分属させた。その結果、「王子・使者は散兵馬使、或いは押牙と為り、余は皆卒と為」ったという³⁹⁾。重要なのは、清素の叔父が長安から急いでやって来て参加している事実である。このことから、遅くとも元和年間に至るまで、兩京の間のソグド人一族の間では、まだ頻繁な往来があったことを示している。この経緯は中晩唐の洛陽にソグド人聚落が存在したことを示しており、我々が、中晩唐の洛陽には必ずやもっと多くのソグド人の存在があったと理解するのに役に立つのである。

近年、洛陽地区で出土したソグド人墓誌で、安史の乱前後のものには、「安公夫人康敦墓誌」（垂拱三年）⁴⁰⁾・「康老師及夫人史氏墓誌」（垂拱三年）⁴¹⁾・「史多（北勒）墓誌」（開元七年）⁴²⁾・「史諾匹延墓誌」（開元九年）⁴³⁾・「康遠及夫人曹氏墓誌」（開元九年）⁴⁴⁾・「康仙昂墓誌」（天寶九載）⁴⁵⁾・「安思温及夫人史氏墓誌」（天寶十載）⁴⁶⁾・「何澄墓誌」（貞元十八年）⁴⁷⁾・「史然墓誌」（元和六年）⁴⁸⁾・「廬江郡夫人（何澄夫人）墓誌」（元和八年）⁴⁹⁾があり、様々な方面から我々の洛陽におけるソグド人に対する認識を補充してくれる。

39) 『資治通鑑』卷232, 中華書局標点本, 1956年, 7492-7493頁。

40) 毛陽光2009b, 74-75頁, 図1。

41) 『全唐文補遺』8 [294-295頁], 『洛陽新獲墓誌續編』[54頁], 毛陽光2009a [77-78頁]を参照。

42) 趙振華2009, 80-82頁。

43) 毛陽光2006, 82頁。

44) 『全唐文補遺』（千唐志齋新藏專輯）, 136-137頁；『新中国出土墓誌・河南』[三]（千唐志齋[壹]）上冊, 103頁, 下冊, 78頁；毛陽光2009a, 76-77頁。

45) 毛陽光2009b, 78-79頁, 図4。

46) 『全唐文補遺』（千唐志齋新藏專輯）, 221頁；『新中国出土墓誌・河南』[三]（千唐志齋[壹]）上冊, 169頁, 下冊, 124-125頁；毛陽光2009a, 78-79頁。

47) 毛陽光2009b, 76頁, 図2。

48) 趙君平編『邙洛碑誌三百種』, 272-273頁；毛陽光2009a, 75-76頁。

49) 毛陽光2009b, 76-77頁, 図3。

4 ソグド人を判断する問題について

我々は現在、すでに数多くの石刻史料、特に墓誌の記録する墓主や祖先の系譜・妻の一族・子孫などの状況を把握しているが、肝心なのは、彼（彼女）らがソグド人であるかどうかという問題である。最近のソグド人の首領クラスの墓の発見とソグドに関連する石刻史料の大量の公刊によって、ソグド研究のブームが巻き起こっている。しかし同時に「汎ソグド化」「汎祿教化」といった傾向もみられ、十分に論証しないまま、墓主がソグド人であると断定してしまうことも生じている。ソグド人の墓誌であるかどうかを議論する時、二つの状況がある。一つは、似たような状況について、先人がすでに論証していて、我々が再度行う必要がなく、墓誌の主をソグド人としても問題ない場合である。もう一つは、我々がソグド人であると確定するにあたって、改めて論証しなければならない場合である。

桑原鷲蔵・向達両氏の研究以来⁵⁰⁾、大多数の学者は主として一個人の姓にもとづき、さらに関連するその他の記載をつなぎ合わせてソグド人であるかどうかを判断してきた。その中で中国の伝統（先秦以来）的姓氏の中には見られない康・安・米の三姓の人は、基本的に問題無いといえる。康・安の二姓の人は、おそらく康居・安息の人であるけれども、しかし北朝・隋・唐時期には、この二つの中央アジアの古代王国はすでに存在しておらず、それゆえに康・安の両姓は基本的にはソグド人の中に入れることができる。ただし、その中には極めて少数であるけれども、漢代に中国へ移住してきた康居・安息人の末裔もいたであろう⁵¹⁾。その他、史・石・曹・何・穆・畢などの姓は、伝統的な中国の姓であり、それゆえ関係する人物の記載に対して、「胡人（ソグド人）」と関連する来歴・婚姻・宗教信仰などの方面で説明ができれば、ソグド人とみなしてよいだろう。

蔡鴻生氏は、陳寅恪氏の関係ある記述を総合し、唐代の「西胡」を識別する基準を概括し、以下の五項目に整理した。

- (1) 胡貌——深目・高鼻・多鬚は、胡人を構成する外部の特徴であり、胡漢を区別する自然な基準である。
- (2) 胡姓——「国を以て姓と為す」は漢訳された胡姓の通例であり、「昭武九姓」はすなわち典型的な西胡の姓氏である。
- (3) 胡名——胡名を音訳したものは、漢名とは大いに趣が異なる。中国史書中の胡名の音

50) 桑原鷲蔵1926, 565-660頁；向達1930。

51) 漢代に中国へ移住した康居・安息の人は、おもに仏教僧侶であり、基本的には子供はいなかった。しかし、中には出家前に中国へ移住した一般の人もいたはずであるが、史料上の記載は極めて少ない。

義は、現在にいたるまで、依然として検討をまわっている。

(4) 胡俗——これは漢人と胡人とを区別する文化基準である。「胡旋女」は歌い踊ることができ、「酒家胡」は酒を販売して生計をたてており、「商胡」は行商、「火胡」は火を拝するなど、すべて胡俗の具体的表現である。

(5) 胡気——すなわち「腋臭」のこと。これは陳寅恪氏の独創的業績であり、「世の我国の中古時代の西胡人種を考論じる者は、止だ高鼻深目多鬚を以て特徴となし、いまだかつてひとつも腋氣に及ばない」とし、そこで彼は「狐臭与胡臭」[『寒柳堂集』, 上海古籍出版社, 1980年, 140-142頁] という論文を書いたのである⁵²⁾。

つまり、外観的特徴・胡姓・胡名・文化的特徴および胡人特有の匂いが、唐朝の西域胡人を判断する五つの条件であるとする。

このほか、福島恵氏もソグド人を判断する基準を総括している⁵³⁾。すなわち、

- (i) 出身地の明確な記録。
- (ii) 先祖がかつてソグド人聚落の首領たる「薩宝」の職位に就いていたこと。
- (iii) 上記の条件と血縁的關係のある人物はソグド人と肯定できる。

の三点である。そして以下の三つの条件に符号する場合、ソグド人である可能性がきわめて高いとする。すなわち、

- (iv) ソグド姓の人物と婚姻関係にある人物。
- (v) 名前がソグド語で解釈できる人。
- (vi) その出自がソグドと深い関係にある地域、例えば河西回廊の敦煌・酒泉・武威やソグド軍人が集中していた盧龍・成徳・魏博鎮等である場合。

の三点である。最近、齊藤達也氏は福島恵論文をもとにさらに帰納的に以下の点を論じた⁵⁴⁾。

- (a) 出身地が「康居」・「粟特」あるいはそのほかのソグディアナ各国と明記してある場合。
- (b) ソグド語あるいはソグド人特有の名、例えば Nanai, vandak, farn 等を採用している場合。
- (c) 薩宝と関係ある者。
- (d) 血縁や婚姻関係によってソグド姓やその社会集団に属している場合。
- (e) 中国在住ソグド人に特徴的な産業・身分（例えば商人・富豪および西方の文化を関係ある人）の胡人である。

52) 蔡鴻生「〈讀鶯鶯傳〉の眼界和思路」, 蔡鴻生2004, 54-55頁。

53) 福島恵2005, 137-146頁。

54) 齊藤達也2009, 44頁。

つまり、研究の進展により、「胡人」に対する判断が次第に厳密になっていることがわかる。上記三名の見方と私自身の意見を帰納すると、以下の特徴を備えた者は基本的にソグド人であると考えることができる。

- ① 西域あるいはソグド各国（康居や安息などの古い国の名称も含む）の出身であると称しているもの。
- ② 高鼻・深目・多鬚などの「胡人」の外観的特徴を備え、また「胡人」の匂いを帯びているもの。
- ③ 康・安・史・石・曹・何・米・穆・畢などの胡姓（ソグド姓）を有する者。おそらくさらに羅・翟・賀・魚（虞）等の姓もソグド姓に含まれる。
- ④ 音訳に特徴的な「胡名」を持つ者。我々の知識には限界があるので、目下のところただ部分的にソグド語をもって解釈するだけである。
- ⑤ 「胡人」の文化的特徴を持つ者。例えば歌うことができ舞踏に優れ、あるいは祆教を信奉するなど。
- ⑥ 先祖及び本人が「胡人」聚落の首領・薩寶・天主・祆祝等を担当している者。
- ⑦ その他の「胡人」と通婚する者。これには月氏・波斯・突厥・焉耆等の西北の「胡人」も含まれる。
- ⑧ 「胡人」の職業・技能を有す者。例えば商人・酒家・通訳・職業軍人・宮廷侍衛。
- ⑨ 突厥化の特徴を有す者。戦闘に秀で、放牧に携わるなど。
- ⑩ 「胡人」の性格の特徴を持つ者。財をむさぼり利益を尊ぶ。容易に翻る。凶悪。勇敢。
- ⑪ その来歴・郡望・封爵の中にソグドと関係が密接な地名、例えばソグド人聚落の所在地や、あるいは西方を代表する名詞、例えば天山・蒲海・蔥嶺・關右がある場合。

これらのうち、前半の6項目を持っていれば、基本的にソグド人と認めてよいであろう。後半の5項目については、ソグド人だけに見られる特徴ではなく、ソグド人以外の「胡人」や漢人ですらも同様に備えている特徴でもある。この場合、ソグド人と判断するには、同時にその他の項目も備えている必要がある。我々が目にする実際の「胡人」の事例において、一個人のうちにソグド人と関連する全ての記録がそろっていることは不可能である。しかし一個人が、もし上記の項目のうち二、三個の特徴を持っているならば、基本的にソグド人とみなして差し支えない。さらにもう一つ、中国へ移住した後のソグド人は、結局のところ、どの程度の様態ならば「ソグド人」、あるいは「ソグド人の後裔」と呼ぶことができるのかという問題がある。研究者の中には「漢化ソグド人」という概念を使用する者もあり、また中晩唐のあるソグド人らはすでに「漢人」になっていると考える人もいる。これは「突厥化ソグド人」が結局のとき

る「ソグド人」なのか「突厥人」なのかという問題と関係するものである。

ここには「胡人漢化的世代層次」（蔡鴻生氏の用語）の問題が存在する。陳寅恪氏は、白居易と元稹の家系を検討した時、次のように述べた。

吾が国の中古時代、西域の胡人が中土に移住してきたが、その〔移住してからの〕年代がきわめて近い者は、とりわけ研究する価値がある。もしその年代がはるか昔のこととなり、すでに同化してわずかな痕跡も無くなり追求できないものについては、ただそのわずかな他の標識、すなわち「胡姓」について詳細に考察しても、おそらく何らかの発見があるとは限らない。そして、吾が国の中古史における「種族の区分は、その人の受けた文化に多くが関係し、その継承している血統にあるのではない」という事例によって言えば、この問題もまた議論しようがない。故に元微が鮮卑の出身であり、白楽天が西域の出身と考えるのは、全くでたらめな説ではないが、無用な論なのである⁵⁵⁾。

蔡鴻生氏は陳寅恪氏の論に拠って、次のように考えている。

魏晉以降、隋唐に至るまで、「胡人」の漢化の問題は、文化史上重要な地位を占めている。その中で「興生胡」と「土生胡」の違いについては、識別することは難しくないようである。ただ、土生胡がどの程度中華化しているのかについては、厳密な分析をしなければ、混乱が生じやすい。例えば、墓誌あるいは文書中の胡姓（もと西胡あるいは東胡に出自する姓）に依拠し、なにがしは「胡」族の種類に属すと断言したり、さらにはある時のある場所に「胡人」の聚落があったと考えるならば、いずれも他の人に信じてもらえないだろう⁵⁶⁾。

これは方法論上から、墓誌を利用する際に分析を加えずに「胡人」であると説明するやり方に対する批評である。蔡氏は「胡人」を外来の者（興生胡）であるか、それとも現地で生まれ育った者（土生胡）であるかに分け、土生胡の漢化がどの程度のものかに対して、厳密な分析をしなければならないと考えている。ここでは土生胡の墓誌あるいは文書を利用してただちに結論を下す方法を批評しているが、その言外には、この「土生胡」はすでに漢化しており、「胡人」聚落の存在を証明することはできないという意味が含まれている。

陳寅恪氏が検討した問題は、すでに完全に漢化した白居易と元稹の二大詩人であり、故に種族の問題はすでになんの意味もなく、鍵となる問題は文化であると考えた。元稹と白居易はす

55) 陳寅恪『金明館叢稿初編』、北京：三聯書店、2001年、365-366頁。【訳者注】この引用部分は、1978年に上海古籍出版社が出版した陳寅恪文集では、『元白詩箋證稿』の附論「(甲)白樂天之先祖及後嗣」[307-308頁]に収録されている。

56) 蔡鴻生「〈陳寅恪集〉的中外關係史學術遺產」[蔡鴻生2004、81-82頁]を参照。

で完全に漢化していたので、陳氏は漢人として扱ったのである。しかし、ソグド研究の研究方向は、陳寅恪氏の研究方向とは正反対であり、ソグド人のかすかな手掛かりを見つけ出して、ソグド人が中国に残した痕跡を探しだすものなのである。もし、これらの痕跡がただ一つの証拠だけならば、蔡鴻生氏の言うような落とし穴に陥ることになるが、もしこれらの痕跡が一つだけではなく、ある場所におけるこのような「胡人」が一人だけでなかったら、新しい見方を打ち立てることができるだろう。ただ、陳・蔡両氏の胡人の中国移住の年代問題を注意しなければならないという指摘は、確かに石刻史料をどのように利用してソグド人研究を行うのかということに関係があり、そして「泛ソグド化」に陥らないための鍵でもあるといえる。

ある人が「胡人」であるか「漢人」であるかを判断する際、主な判断点は種族と文化の二点である。種族は根本的な部分、文化は表徴である。あるソグド人がソグディアナから中国へ移住してきた直後は、種族面からも文化面からもソグドであるということが出来る。そして私の考察によれば、これら中国へやってきたばかりのソグド人は、一般に彼ら自身の植民聚落の中で生活し、「胡人」と通婚するので、彼らが受ける漢化の影響はまだ比較的少ない⁵⁷⁾。特に種族の上では、彼らはまだ漢人と通婚して混血しておらず、それゆえに正真正銘のソグド人といえる。しかし、中国に三世代にわたって居住した後、ソグド人は漢人社会に融合していき、漢人と結婚して次第に漢化していき、ゆっくりと文化の上においても段々と漢文化の色彩を現わしていくようになる。それゆえ、移住してから三世代以降のソグド人は、「漢化ソグド人」と呼ぶことができる。しかし、彼らは、多かれ少なかれ、依然として先に帰納した11項目のソグド的特徴のいくつかを保留しており、ゆえに彼らは完全な「漢人」というわけではない。私は、彼らを「ソグド人の後裔（粟特人後裔）」あるいは「ソグドの子孫（粟特後裔）」と呼ぶのが適当であると思う。しかし「ソグド人の後裔」は依然として「ソグド人」と言ってよい。これが本論で「ソグド人」という統一した呼称を用いた理由である。彼らの言語・宗教・生活習慣、さらには種族の特徴がすべて完全に漢化してやっとな漢人になったということが出来るのである。たとえば彼がまだソグド姓を保持していたとしても。

上記のように、三世代を境界線として「ソグド人」であるのか、あるいは「ソグド人の後裔」であるのかを判断することは、ただおおまかな境目にすぎず、おそらく三世代を経ずして漢化するものもあれば、何世代も漢化しなかったものもあり、実のところ、歴史上の実際の状況は非常に複雑である。例えば、私の考察によれば、北朝・隋・唐時期の「胡人」聚落は郷里制に再編されていくが、地方におけるその変化していく順序は一致しておらず、それゆえに中国各

57) 榮新江「北朝隋唐粟特聚落的内部形態」[榮新江2001b, 111-168頁]を参照。

地におけるソグド人の漢化の速度も同じではない⁵⁸⁾。ソグド人の中には、ある地域で集中して生活し、非常に長い期間、史書に何ら記録されることが無く、晩唐時期に突然出現するものもいた。例えば沙陀に属したソグド人は⁵⁹⁾、全く漢化していないソグド人である。さらには、ソグド人の東方移住は、ある決まった時期にやってきたのではない。それは、数百年の間に陸続と移住してきたものである。それゆえ早くに移住してきたソグド人が漢化した後に、新たにやってきた者は全身ソグド臭を放っていることになる。つまり我々は同じ尺度で同一時期のソグド人を観察することはできないのである。

ソグド人であるかどうか、ソグド人かあるいはその後裔であるのかの判断については、さらに多くの作業を必要とし、判断の方法にも多くの種類がある。以下、二点を示すこととする。

1. ソグド人の墓誌銘を考察する時、もし同時に出土した他の文物があれば、墓主の文化的特徴の構成要素として考慮すべきである。例えば、多くの「胡人」の墓葬の中で、我々は指輪や冥土でのお金としてのビザンツ金貨・ササン朝ペルシア銀貨、さらには黄金のマスクといった漢人の墓葬ではあまり見ることのない舶来品を見ることができる。例えば、武威の安氏一族出身の安元壽は、死後、昭陵に陪葬された。彼は安興貴の子であり、彼の世代にいたるまでに、この一族は中国に移住して数世代も経ている。彼の墓誌は国子監祭酒の郭正一が撰述している。もし彼が武威の安氏の子孫であると知らなければ、彼の種族がソグド系であることを見出すことは困難である。と言うのは、先祖を追述している中で、一句たりとも先祖がかつて「薩宝」であったとは言及しておらず、ただ最後の銘の中において、「媯水導源」という表現で彼が西域の出身であることを示しているだけなのである⁶⁰⁾。しかし、安元壽の墓から出土した文物を見ると、彼の墓室の石門の門楣の左側に「安胡」の二字が刻されており⁶¹⁾、当時の人の目には、安元壽は生粋の「安国胡人」であると映っていたことが明らかとなる。このことは、最近、昭陵に赴き、出土文物を整理した北京大学考古文博学院の沈睿文氏が注意されたことで、かつ私にその情報を寄せられたものである⁶²⁾。

2. 中国伝統の系図学・姓名学などの手段を利用し、ソグド人の痕跡を追うこと。我々がよ

58) 榮新江2009。

59) 森部豊2001：2004a；2004bを参照。

60) 『隋唐五代墓誌彙編・陝西卷』3，98頁；『全唐文補遺』1，67-69頁。

61) 張沛『昭陵碑石』（三秦出版社，1993年，202頁）「安元壽墓誌銘」の注[-]を見よ。

62) 彼はさらに、昭陵博物館（陳志謙執筆）「唐安元壽夫婦墓發掘簡報」[『文博』1988年第12期，37-49頁]の報告は臨川公主墓の門額・門楣・門柱・門檻・門墩（白石製）を誤って安元壽墓のものとしていると指摘した。安元壽の石門は石灰岩製であり、「簡報」ではただ石灰岩製の二つの石門扇のみだけが安元壽のものとしてされているにすぎない（沈睿文2010年2月3日の書信）。

く使う『元和姓纂』・『新唐書宰相世系表』・『古今姓氏書辨證』以外、家系や、姓氏に関する各種の著作を広く利用し、個々の姓氏の来歴やいきさつをはっきりとさせる必要がある。同時に、中国伝統の行状・伝記・墓誌の書き方にも習熟し、あわせて「胡人」が黄帝の子孫や有名人の子孫であると仮託すること、および出生地を変えたり郡望をも仮託したりするやり方がどのように重層的に構築されているかを理解する必要がある。実際、このような仮託という手法は「胡人」の墓誌にだけに限られるものではなく、漢人の墓誌も同様である。

新出石刻史料の増加は、ソグド人墓誌の記載する真実と虚構の部分とを判別する助けになっている。我々はこれらの石刻史料を合理的に利用し、中国へ移住したソグド人の豊かで様々な状況を明らかにし、あわせてソグド研究のより一層の進歩をおしすすめていく必要がある。

参考文献

(1) 中文

- 蔡鴻生2004：『仰望陳寅恪』，北京：中華書局，2004年。
- 程林泉・張翔宇・山下将司2008：「北周康業墓誌考略」，『文物』2008年第6期，82-84頁。
- 葛承雍2009：「祆教聖火芸術の新發現——隋代安備墓文物初探」，『美術研究』2009年第3期，14-18・90-91頁+図版1-4・彩版1-3。
- 毛陽光2006：「兩方唐代史姓墓誌考略」，『文博』2006年第2期，82-85頁。
- 2009a：「洛陽新出土唐代粟特人墓誌考釈」，『考古与文物』2009年第5期，75-80頁。
- 2009b：「新見四方唐代洛陽粟特人墓誌考」，『中原文物』2009年6期，74-75頁。
- 榮新江1994：「西域粟特移民考」，『西域考察与研究』，新疆人民出版社，1994年，157-172頁；→榮新江2001b，19-36頁。
- 1999a：「北朝隋唐粟特人之遷徙及其聚落」，『国学研究』第6卷，北京大学出版社，1999年，27-85頁；→榮新江2001b，37-110頁。
- 1999b：「〈歷代法寶記〉中の末曼尼与弥施訶——吐蕃文献中の摩尼教和景教因素的来歴」，王堯編『藏学研究叢刊・賢者新宴』，北京出版社，1999年，130-150頁；→榮新江2001b，343-368頁。
- 2001a：「隋及唐初并州的薩保府与粟特聚落」，『文物』2001年第4期，84-89頁；→榮新江2001b，169-179頁。
- 2001b：『中古中国与外來文明』，北京三聯書店，2001年。
- 2003a：「薩保与薩薄：北朝隋唐胡人聚落首領問題的爭論与辨析」，葉奕良編『伊朗学在中国論文集』第3集，北京大学出版社，2003年，128-143頁。
- 2003b：「北朝隋唐胡人聚落的宗教信仰与祆祠的社会功能」，榮新江主編『唐代宗教信仰与社会』（『北京大学盛唐研究叢書』），上海辭書出版社，2003年，385-412頁+図1-9。
- 2004a：「安史之乱後粟特胡人的動向」，紀宗安・湯開建主編『暨南史学』2，暨南大学出版社，2003年12月（2004年4月），102-123頁。
- 2004b：「四海為家——粟特首領墓葬所見粟特人的多元文化」，『上海文博』2004年4期，85-91頁+図1-11。
- 2004c：「中古中西交通史上的統万城」，陝西師範大学西北環發中心編『統万城遺址綜合研究』，三秦出版社，2004年7月，29-33頁。
- 2005a：「金樽美酒醉他鄉——從安伽墓看粟特物質文化的東漸」，『文物天地』2005年第1期，88-91頁。

- 2005b:「北周史君墓石槨所見之粟特商隊」,『文物』2005年第3期,47-56頁+図1-6。
- 2005c:「西域粟特移民聚落補考」,『西域研究』2005年第2期,1-11頁。
- 2006a:「粟特与突厥——粟特石棺圖像の新印證」,周偉洲編『西北民族論叢』第4輯,中国社会科学出版社,2006年3月,1-23頁。
- 2006b:「新出トゥルフアン文書に見えるソグドと突厥」(張娜麗訳),『環東アジア研究センター年報』第1号,新潟大学,2006年3月,5-15頁。
- 2006c:「有関北周同州薩保安伽墓的幾個問題」,張慶捷等編『4~6世紀の北中国与欧亚大陸』,北京:科学出版社,2006年12月,126-139頁。
- 2007a:「北朝隋唐粟特人之遷徙及其聚落補考」,『欧亚学刊』第6輯,中華書局,2007年6月,165-178頁。
- 2007b:「新出吐魯番文書所見の粟特人」,『吐魯番学研究』2007年第1期,28-35頁。
- 2007c:「魏晋南北朝隋唐時期流寓南方的粟特人」,韓昇編『古代中国:社会轉型与多元文化』,上海人民出版社,2007年12月,138-152頁。
- 2007d:「新出吐魯番文書所見唐龍朔年間哥邏祿部落破散問題」,潘衛榮主編『西域歷史語言研究集刊』1,科学出版社,2007年12月,13-44頁。
- 2008:「新出吐魯番文書に見える唐龍朔年間の哥邏祿部落破散問題」(西村陽子訳),『内陸アジア言語の研究』XXIII(森安孝夫教授還曆記念特集号),2008年7月,151-185頁+pls.XII-XX。
- 2009:「徙聚落到鄉里——敦煌等地胡人集团的社会変遷」,高田時雄主編『敦煌写本研究年報』第3号,京都大学,2009.3,25-36頁。
- (待刊):「唐代六胡州粟特人の畜牧生活形態——2007年西北農牧交錯地帯城址与環境考察紀略」,妹尾彦彦編『都市与環境の歴史学』,待刊。
- 榮新江・張志清2004(編):『徙撒馬爾干到長安:粟特人在中国的文化遺跡』,北京図書館出版社,2004年4月。
- 榮新江・華瀾・張志清2005(編):『粟特人在中国——歴史・考古・語言の新探索』,中華書局,2005年12月。
- 史睿2004:「金石学与粟特研究」,榮新江・張志清2004,34-40頁。
- 蘇航2005:「北朝末期至隋末唐初粟特聚落鄉团武裝論述」,『文史』2005年第4輯,2005年11月,173-186頁。
- 向達1930:「唐代長安与西域文明」,『燕京学報』專号2,1930年;→『唐代長安与西域文明』,北京:三聯書店,1957年,1-116頁+図1-10。
- 張乃翥2009:「洛陽景教經幢与唐東都“感德鄉”的胡人聚落」,『中原文物』2009年第2期,98-106頁。
- 趙振華2009:「唐代粟特人史多墓誌初探」,『湖南科技学院学報』第30卷第11期,2009年11月,79-82頁+図版。
- (待刊):「唐少府監鄭岩及其粟特人祖先」,『中国歴史文物』,待刊。
- (2)日文:
- 桑原鷲藏1926:「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」,『内藤博士還曆祝賀支那学論叢』,京都:弘文堂,565-660頁;→『桑原鷲藏全集』第2卷,東京:岩波書店,1968年,270-360頁。
- 齊藤達也2009:「北朝・隋唐史料に見えるソグド姓の成立について」,『史学雑誌』118-12,38-63頁。
- 福島惠2005:「唐代ソグド姓墓誌の基礎的考察」,『学習院史学』第43号,135-162頁。
- 森部豊2001:「後晋安万金・何氏夫妻墓誌銘および何君政墓誌銘」,『内陸アジア言語の研究』16,1-69頁。
- 2004a:「8-10世紀の華北における民族移動—突厥・ソグド・沙陀を事例として—」,『唐代史研究』第7号,78-100頁。

- 2004b : 「唐末五代の代北におけるソグド系突厥と沙陀」, 『東洋史研究』第62巻第4号, 東洋史研究会(日本), 60-93頁。
- 山下将司2004 : 「新出土史料より見た北朝末・唐初間ソグド人の存在形態——固原出土史氏墓誌を中心に」, 『唐代史研究』第7号, 60-77頁。
- 2005 : 「隋・唐初の河西ソグド人軍団——天理図書館蔵〈文館詞林〉〈安修仁墓誌銘〉残巻をめぐって」, 『東方学』第110輯, 65-78頁。
- 2008 : 「唐の監牧制と中国在住ソグド人の牧馬」, 『東洋史研究』第66巻第4期, 539-569頁。

(3)西文

- Carter, M. L. 2002 : “Notes on Two Chinese Stone funerary Bed Bases with Zoroastrian Symbolism”, *Iran Questions et connaissances, vol. I: La periode ancienne* (Studia Iranica, Cahier 25), ed. Philip Huyse, Paris 2002, pp. 263-287.
- Moriyasu, T. 2008 : “Japanese Research on the History of the Sogdians along the Silk Road, Mainly from Sogdiana to China”, *Acta Asiatica*, 94, 2008, pp. 1-39.
- Rong Xinjiang 2000 : “The Migrations and Settlements of the Sogdians in the Northern Dynasties, Sui and Tang” (tr. by Bruce Doar), *China Archaeology and Art Digest*, IV.1: Zoroastrianism in China, December 2000, pp. 117-163.
- 2003 : “The Illustrative Sequence on An Jia’s Screen: A Depiction of the Daily Life of a *Sabao*”, *Orientalia*, February 2003, pp. 32-35 + figs. 1-7.
- 2006a : “Sogdians around the Ancient Tarim Basin”, *Ērān ud Anērān. Studies Presented to Boris Il’ič Maršak on the Occasion of His 70th Birthday*, eds. M. Compareti, P. Raffetta and G. Scarcia, Venezia: Libreria Editrice Cafoscarina, 2006, pp. 513-524.
- 2006b : “New Light on Sogdian Colonies along the Silk Road, Recent Archaeological Finds in Northern China”, *Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften. Berichte und Abhandlungen*, Band 10, Berlin: Akademie Verlag, Oktober 2006, pp. 147-160.
- 2006c : “The Sogdian Caravan as Depicted in the Reliefs of the Stone Sarcophagus from Shi’s Tomb of the Northern Zhou”, *Chinese Archaeology* (中国考古学), vol.6, Beijing: China Social Sciences Press, 2006. 12, pp. 181-185+figs. 1-4.
- 2009a : “Further Remarks on Sogdians in the Western Regions” (tr. by Wen Xin), *Exegisti monumenta. Festschrift in Honour of Nicholas Sims-Williams* (Iranica 17), eds. Werner Sundermann, Almut Hintze and François de Blois, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2009, pp.399-416.
- 2009b : “*Sabao* and *Sabo*: On the Problem of the Leader of Sogdian Colonies during the Northern Dynasties, Sui and Tang Period” (tr. by Wang Yuanyuan), *Collection of Papers on Iranian Studies in China*, ed., by Ye Yiliang, Peking University Press, 2009. 5, pp. 148-162.

(2010-2-6初稿, 2010-7-11改訂)

【訳者解説】

本稿は、2010年2月12日、関西大学東西学術研究所で行われた特別講演会において、北京大学中国古代史研究中心の榮新江教授が「新出土石刻史料によるソグド人研究動向」と題して講演された原稿をもとに、その後、修訂を加えられた「新出石刻史料所見粟特人研究的動向」を

訳出したものである。

榮新江教授は、2009年12月から2010年2月まで、関西大学文学部に滞在され、日本におけるソグド研究の最新動向の調査に従事された。この間の成果の一つが、上記の講演会における発表であり、また本稿の内容である。

本稿は、中国において次々と発見されるソグド人に関する石刻史料に関して、その中国での整理・公刊状況の紹介、榮新江教授の石刻史料調査とその成果、近年出土した重要なソグド人関係の石刻史料の紹介、そして今後のソグド研究に対する展望を概括的に述べたものである。

本稿の最も重要な価値の一つは、第2節「ソグド人に関する石刻史料の調査」にある。ここでは、2001年に陝西省靖辺県で出土した「翟曹明墓誌」の全文が、中国大陸での発表に先駆けて公表された。本墓誌の史料的価値は様々な観点から指摘しうるのであろうが、特にこの墓主の翟曹明が「西国」出身であり、北周時代に夏州の地で「天主」「儀同」の職に就いていたことが特筆される。「天主」の語は、2004年に陝西省西安市で発見された康業墓から出土した墓誌銘にも「大天主」の語で出現する。これは、中国に建設されたソグド人聚落において、彼らが信仰する祇教を管轄した官職でないかと考えられている。また、「儀同」とは軍府長官職であるから、このことから翟曹明はソグド兵を率いていたのではないかという可能性も指摘できる（以上、山下将司「隋唐の建国と中国在住ソグド人」『東西交渉とイラン文化』（アジア遊学137）、勉誠社、2010年、190-198頁）参照）。

一点だけ、本稿で榮新江教授が勘違いされている個所があるので指摘し、訂正しておきたい。本稿第3節「新出石刻史料のソグド人研究に対する貢献」の「(4) 洛陽景教経幢と安史の乱後におけるソグド聚落」において、榮新江教授は、「2006年5月、洛陽隋唐故城の東郊で非常に珍しい景教の経幢が出土した。」と言っているが、これは誤解である。おそらく、張乃翥「跋洛陽新出土的一件唐代景教石刻」(『西域研究』2007-1 →葛承雍(主編)『景教遺珍』, 文物出版社, 2009年, 5-16頁)に拠ったのだろう。

しかし、羅炤「洛陽新出土《大秦景教宣元至本經及幢記》石幢的幾個問題」(『文物』2007-6 →『景教遺珍』, 34-58頁)と洛陽市第二文物工作隊「洛陽景教石経幢出土地的調査」(『景教遺珍』, 165-170頁)の報告を合わせると、洛陽の景教経幢は、以下のような経緯をたどって発見されたこととなる。

1976年ころ、洛陽市の斉村の農民が干ばつ対策で井戸を掘った際、この経幢を発見した。経幢はその後、村の脱穀場に置かれ、2000年ころ道路の傍らに再び放置されたが、盗難に遭うのを恐れた人が、斉村の小学分校の校庭に移したらしい。しかし、何年か前にそこから盗まれたという（以上、斉村農民の談）。

ところが、2006年5月、盗掘者がこの経幢を掘り出し、2006年8月の段階で上海に転売されたという情報が流れた。これは、齊村から盗んだ経幢を骨董市場で売却した際のセリフだったのである。羅焯氏は、2006年の8月にこの情報を得、また洛陽においてこの経幢の拓本を見た後、北京にもどり、国家文物局に報告した。その結果、経幢を買い戻し、洛陽第二文物工作隊で保管させたということである。

なお、2009年12月に、訳者（森部）が洛陽に調査に赴いた際、この経幢は新たに建設された洛陽の博物館で臨時に公開・展示されていた。

榮新江教授が本稿を脱稿された後、中国で新たに以下の二書が出版されたので、書誌情報を追加しておく。

1. 趙振華『洛陽古代銘刻文献研究』（三秦出版社、2009年）
2. 故宮博物院編『故宮博物院藏歷代墓誌滙編』（紫禁城出版社、2010年）

趙振華氏の著書は、洛陽出土の後漢から元までの石刻史料やその他の銘刻史料を網羅し、それぞれ拓本写真を掲載し、釈文をほどこし、考察を加えた研究書である。そのうち、ソグド人に関しては「安菩墓誌」と「史孝章墓誌銘」などが取り上げられている。

『故宮博物院藏歷代墓誌滙編』は、1949年以降、北京の故宮博物院が収集した石刻史料のうち、中原出土墓誌234方と高昌磚誌122方（図版は66幅）が収録されている。既発表のものが大半のようだが、中には新発表のものもある。ソグド人関係の墓誌としては、「翊鷹副尉前守澤州太行鎮將騎都尉安孝臣母米氏墓誌銘」[第1冊、210-211頁]がおそらく初めての公表なのでなかろうか？ちなみに「安孝臣墓誌銘」はすでに『千唐誌齋藏誌』[文物出版社、1989年、738頁]で発表されている。

最後に、榮新江教授が本稿で載録している安備墓誌であるが、これは現在、陝西省西安市に建設された大唐西市博物館で展示・公開している。偽作説も付きまとっているが、実物を見る限り、あれが偽作ならば、相当精巧なものだと言わざるを得ない。訳者は2010年12月に当博物館を訪れ、安備墓誌の調査を行った。墓誌は18行、1行あたり18字。以下、その釈文を掲載しておく。

【安備墓誌】

- 1 故開府長兼行參軍安君墓誌銘
- 2 君名備字五相陽城縣龍口鄉曹劉里人其先
- 3 出於安居耶尼國上世慕中夏之風大魏入朝
- 4 名沾典客父知識齊車騎大將軍直盪都督千

- 5 乘縣散男君種類雖胡入夏世久與漢不殊此
- 6 即蓬生麻中不扶自直者也善於白圭之術蓋
- 7 而不為玄高之業棄而不慕訥言愍行唯事安
- 8 親室名龍駒鄉號指南孝悌之響聞於邦國武
- 9 平之末齊許昌王莫府初開牒為長兼行參軍
- 10 一參府寮備經駟使雖未執斷小心恭奉時輩
- 11 之中謙直遜順屢展懃誠漸望昇進但事與願
- 12 遠遇周統齊許昌失寵歸於廉之第君便義絕
- 13 遂還舊廬斂志東畢歸田二頃忽縈疾醫僚无
- 14 工大命運窮奄從朝露時年卅有四以大隋開
- 15 皇九年歲次己酉十月辛酉朔廿四日甲申塋
- 16 於潔水之南長分橋側恐山壑時移乃為銘曰
- 17 門櫛貴胄世代高良比蘭斯馨辟蠶能芳弱冠
- 18 釋褐奉事君王年始過立奄歸元常

付記：洛陽發見景教經幢および安備墓誌の調査は、平成21年度・22年度科学研究費補助金基盤研究（B）「ソグド人の東方活動に関する基礎的研究」によるものである。また、初校ゲラに対し、西村陽子氏（国立情報学研究所）から意見をいただいた。お礼を申し上げます。